第四紀研究（The Quaternary Research）36（5）p. 347—349　　Dec. 1997

日本・東南アジアの後期旧石器時代文化

安　蒜　政　雄*

I. 日本後期旧石器時代の石器群と遺跡

日本列島の全域に人類の足跡が印されるようになるのは，約3万年前にはじまる後期旧石器時代をむかえてからのことである．以後，縄文時代に至るまでの約2万年の間に残された，関東地方の遺跡のありかたを検討してみたい．

後期旧石器時代は立川ロームの時代である．立川ロームは，武蔵野台地を基準として表土下，第III層（第1ローム層軟質部），第IV層（第1ローム層硬質部），第V層（第1暗色帯），第VI層（第2ローム層，AT包含層），第VII・VIII層（第2暗色帯上半部），第IX層（第2暗色帯下半部），第X層（第3ローム層以下）に区分され，石器群編年の標式となっている．その第X～VII層と第VI層，それに第V・IV下層には，それぞれに特徴をもったナイフ形石器作りがみられる．また，第IV上・III層では槍先形尖頭器が発達し，第III層からは細石器が出土する．そうしたナイフ形石器作りの段階的な移り変わりと槍先形尖頭器および細石器の登場を基準とすると，関東地方の後期旧石器時代は，第I期から第V期までの5つの時期に分かれる．

その石器群の移り変わりとともに，遺跡のありかたも変化する．第1に，各時期の遺跡の数．遺跡数は，第I期直後の第II期で減少し，第III期には一転して増加しながら第IV期へとつづき，第V期では再び減少する．第2に，遺跡の規模．遺跡の大きさを，仮に大・中・小とすると，第I期には大と小，第II期にも中と小といった規模の違いがある．だが，第III期以降の遺跡には，著しい規模の格差はない．ただし，第III期と第IV期の遺跡が中規模であったのに対して，第V期の遺跡は小規模となる．このように，遺跡は第I・II期，第III・IV期，第V期を区切るようにして，そのありかたを変えるのである．

II. 遺跡の構造性

後期旧石器時代の遺跡を発掘すると，どこからも石器をつくった痕跡が発見される．とはいっても，つくられた石器のすべてが遺跡に留められているわけではなく，逆に遺跡でつくられた形跡のない石器も出土する．さらに，石器作りの原料となる原石群は，各遺跡で一挙に消費されつくされてもいない．こうした状況がおこるのは，どの遺跡もが定住地ではなく，頻繁に移し変えられた居住の場所だったからにほかならない．つくられた石器と消費半ばの原石群とが，移動の先へ先へと順次，繰り越されていたのである．

そのどの遺跡からも発見される石器作りの痕跡は，遺跡の中で数個所に分かれて分布する．ブロックと呼ばれるおのおのでは，いくつかの原石を消費した石器作りが行われている．一つのブロックに残る原石別の石器作りの痕跡をスポットという．一方、ブロックで行われた石器作りには，ほかのブロックと共通した原石も用いられている．互いに同じ原石を用い合った一群のブロックのまとまりをユニットと呼ぶ．このように，後期旧石器時代の遺跡は，石器作りの上で作業の場が違いながらも，原石を共用するかたちとなって表れるスポット－ブロック－ユニットという構造性をもつ．これは，後期旧石器時代人の群れの構造性を反映してもいる．

すなわち，スポットは，石器作りに携わった個々のヒトの存在を示す．そして，石器をつくったヒトびとの間には，遺跡の中でブロックごとに作業場を区分するような群れの核があった．その群れの核とは，石器作りに係わらなかったヒトもふくめた，いわば家族的なヒトの集まりであった可能性が強い．また，ユニットからは，移動先へと計画的に繰り越すため石器と原石を共有・管理し，移動と居住をともにした数家族からなる最も小さい単位的な集団が組まれていた様子がうかがえる．さらに，一つの遺跡に複数のユニットが共存する事例は，小単位集団が決して孤立していたのではなく，時には同じ移動先に居住するような仲間意識で結びつく，より大きな単位の集団に所属していた状態を暗示させる．こうして遺

1996年度日本第四紀学会大会シンポジウムにおいて講演．（日本第四紀学会講演要旨集，26：6-9より再録．）
* 明治大学文学部考古学研究室　〒100 千代田区神田駿河台 1-1.

跡の構造性は，ヒト個人―家族―小単位集団―大単位集団という，集団構成の構造性へと置き換えられてくる．

さきに区分した遺跡の規模の大・中・小は，1ユニットを小規模，三つ前後を中規模，多数のユニットをもつ場合を大規模としたものである．普通，1ユニットは2～3のブロックで形成されている．今日までに知られている最大級の遺跡は，環状ブロック群の呼び名もある，第Ⅰ期の大規模遺跡．代表例の群馬県下触牛伏遺跡は，径50mの空間を26ものブロックが環状に取り囲むほどの巨大さである．ユニット数は10内外とされ，大単位集団属下の各小単位集団が一堂に会したかの観がある．

III. 移動と居住の変動

さて，関東地方の後期旧石器時代の遺跡は，時期によりそのありかたが異なっている．他方，どの時期のどのような規模の遺跡も，そこがある集団の移動先かつ移動元となった居住場所である点に変わりはない．とすると，各時期の集団の移動形態と居住様式には，何らかの違いが生じていたことになる．

まず第Ⅰ期，規模に差のある大・小二者の遺跡があった．だが，両者が同時に存在し，大は大同士，小は小同士で，じかに移動元と移動先のつながりをもったとはいいがたい．というのも，石器と原石の繰り越しは，大規模遺跡でも小規模遺跡でも，ともにユニットごとに行われており，互いに連鎖し合うからである．つまり，大規模遺跡と小規模遺跡との間こそが，時間の前後関係をもって直接つながり合う，移動元であり移動先であった．一地点への大単位集団の集合と，小単位集団別の数地点への散開とが，交互に繰り返されていたのである．集団が集合と散開を反復して別の地点へと移動した，その集合時の居住が，巨大な環状のムラをかまえさせることとなった．遺跡数が減少する第Ⅱ期にも，格差は小さくなるものの中・小二者の遺跡がある．第Ⅰ期に準じた集団の移動と居住が継続したとみてよい．

つづく，遺跡数が増加する第Ⅲ・Ⅳ期，格差はより縮まり中規模化し，遺跡は各河川の流域に群在するようになる．同じ河川の流域一帯に群在する諸遺跡は，一定の間隔をおいて規則的に分布する点などからみて，同時に存在した可能性が大きい．いいかえると，群在する諸遺跡は，ある1，2の集団がつぎつぎと近場の地点に移動し居住した場所ではなかった．大単位集団は，1地点にこそ集合しないが，三つ前後の小単位集団群別に分散して，河川流域数kmの範囲という一つの地区の中に群集していたのである．つまり，各河川流域に群在する諸遺跡の移動元はほかの川筋地区であり，移動先はまた別の川筋地区であった．集団は，それまでのように地点を移しかえての集合と散開をやめ，分散したままの状態で一定の地区内に群集しはじめたのである．その群集地区自体を移しかえた移動の先々にいわゆる川辺のムラが営まれた．

そして，再び遺跡数が減少する第Ⅴ期，遺跡はみな小規模化する．川筋に位置するが，群在することはない．

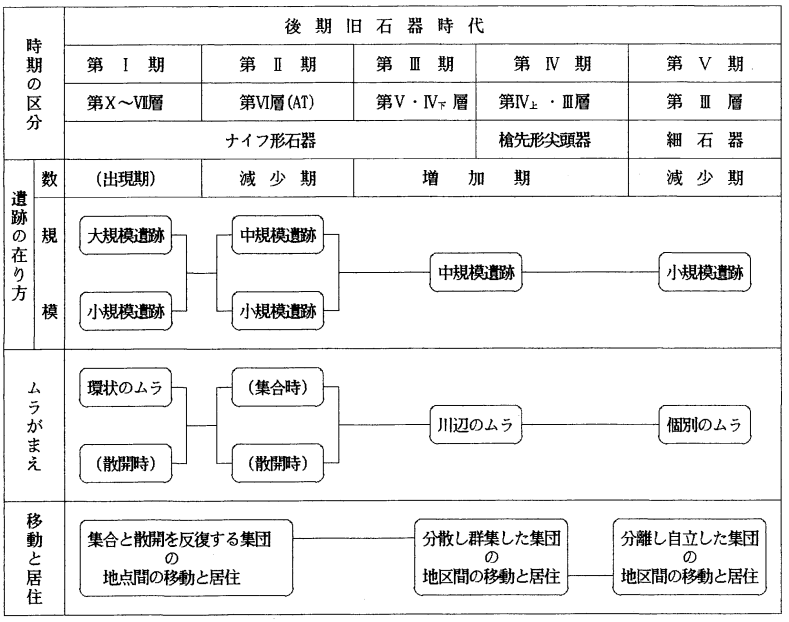

図　関東地方の後期旧石器時代(概念模式図)

加えて，この時期に遺跡数が減少する著しさを移動回数・頻度の低下であったと理解すると，移動先での居住期間の長期化も予測される．すでに分散していた小単位集団群がさらに個々の小単位集団別に分離し，かつての群集地区内に定着性を強め，それぞれを専有の生活領域と化したようである．こうして，各地区ごとに自立する小さいかまえの個別のムラが，集団の移動と居住の基点となった．その 2～3 のブロックが 1 ユニットにまとまる個別のムラは，現象上，数軒の住居址が 1 組となる縄文時代初頭の集落にも似ている．旧石器時代的な集団の移動と居住とが，この第Ⅴ期で終焉をむかえたとみてよいのかもしれない．

以上は，推論の域をでない．とはいえ，遺跡のありかたの変化が，集団の移動形態や居住様式の変動と深く係わり合っていたことは明らかである．

IV. 東アジアの中の日本

ここで，関東地方から日本列島の全域へと目を転じて，東アジアとの関連性をみておきたい．第Ⅰ期には，九州から東北にかけて広く，同じ特徴をもつナイフ形石器作りが行われた．第Ⅱ期になると九州から関東・中部の一帯に別の，第Ⅲ期には中国・四国を中心にさらに別の，それぞれの個性的なナイフ形石器作りが出現する．そうした新しい石器作りが登場するにつれて，次第に九州，中国・四国，関東・中部，東北以北という，日本列島内の地域差が顕在化してくる．ついで，第Ⅳ期に関東・中部で槍先形尖頭器作りが発達したのち，第Ⅴ期に至ると，互いに異なる系統の細石器作りが日本列島を東西で二分し，それまでの枠組みの地域性は刷新される．

そうした地域差の成立した背景を，新たな石器作りが相次いで大陸から伝播し，日本列島を縦断し横断するように波及した結果である，とする説明も不可能ではない．だが，第Ⅰ～Ⅳ期の石器作りは，石器群の層位的な出土状態に空白の時間帯がないばかりか，技術的にも連続性を示す．しかも，東アジア全体を見渡してみても，日本列島ほどナイフ形石器作りが顕著に発達した個所はない．その逆に，第Ⅴ期の細石器作りは，たしかに東アジア各地と共通性をもつが，第Ⅳ期までの石器作りとの間の技術上のつながりに乏しい．となると，日本列島内の地域の枠組みには，異なった二つの成因があったと考えられる．つまり，第Ⅲ期に成立した地域の枠組みは，後期旧石器時代人が日本列島に住み着き住み分けを進めた，列島内部の要因によるものであった．対して，第Ⅴ期のそれは汎東アジアと連動する要因によって成立をみたのである．

以上のような地域の枠組みが推移する過程で，関東地方の遺跡のありかた，すなわち集団の移動形態と居住様式は，第Ⅰ・Ⅱ期，第Ⅲ・Ⅳ期，第Ⅴ期を区切るように変容したのである．第Ⅲ期は，最終氷期の最盛期にも当たる．この日本列島に印された後期石器時代文化の変動とは，人類がどのように自然と対応した経緯を物語っているのだろうか．それは旧石器時代人の生業活動，わけても狩猟生活と直結した，歴史的な出来事だったに違いない．

Masao Ambiru* : Upper Paleolithic Culture in Japan and East Asia.
*Department of Archaeology, Meiji University. Kanda-surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, 101.